

# 応用計量経済分析 TA セッション

## 第 13 回：線形回帰モデルにおける仮説検定

TA：北村友宏\*

2016年1月26日改訂

※以下では（行列でない）確率変数と実現値を小文字で表す。

### 1 線形回帰モデル

- 定数項を含む単回帰モデル（simple regression model）

$$y_i = \beta_0 + \beta_1 x_i + u_i, \quad i = 1, 2, \dots, n, \quad (1)$$

$$u_i \sim iidN(0, \sigma^2) \quad (2)$$

を考える。

- ★  $y_i$ ：被説明変数（explained variable）
  - \* e.g., 農産物の収穫量
- ★  $x_i$ ：説明変数（explanatory variable）
  - \* e.g., 肥料の使用量
  - \* 簡単化のため、非確率変数とする。
- ★  $u_i$ ：誤差項（disturbance term）
- ★  $\beta_0, \beta_1$ ：係数（coefficient）
  - \*  $\beta_0$  は定数項（constant term）、 $\beta_1$  は傾き。
  - \* e.g., 肥料の使用量が 1 多くなると、農産物の収穫量は  $\beta_1$  増加する。
- ★  $iid$  は独立に同一の確率分布に従う（independently and identically distributed）という意味。  
⇒誤差項  $u_1, u_2, \dots, u_n$  は互いに独立に  $N(0, \sigma^2)$  に従っている。

- **確認**

- ★  $y_i$  と  $x_i$  は既知（データとして与えられている）。
- ★  $\beta_0$  と  $\beta_1$  は未知（推定する必要がある）。
- ★  $u_i$  も未知。
- 誤差項の推定値を残差（residual）とよぶ。
- 残差平方和（残差二乗和）が最小となるようにパラメータ推定値（ここでは  $\hat{\beta}_0, \hat{\beta}_1$ ）を求める方法を（通常の）最小二乗法（Ordinary Least Squares, OLS）とよぶ。

---

\* Email: [kitamu.tom@gmail.com](mailto:kitamu.tom@gmail.com) URL: <http://tomkitamura.html.xdomain.jp>

- OLS によって推定されたパラメータを OLS 推定量 (OLS estimator) とよび、その実現値を OLS 推定値 (OLS estimate) とよぶ。
  - ★ 上記の  $\hat{\beta}_0$  と  $\hat{\beta}_1$  が OLS 推定量 (実現値であれば OLS 推定値)。
- $x_i$  と  $y_i$  の間に相関があるかを調べたい。
  - ★ e.g., 「肥料の使用量」と「農産物の収穫量」の間に相関があるか？
  - ⇒上記のモデルで、 $\beta_1 = 0$  なら相関がなく、 $\beta_1 \neq 0$  なら相関がある。
  - ⇒  $\beta_1 = 0$  を  $H_0$  とする仮説検定を行えば、 $\beta_1$  が 0 かどうかを検証できる。

## 2 仮説検定

※  $\beta_1$  に関する検定のみ説明する。

両側検定

$$H_0 : \beta_1 = 0,$$

$$H_1 : \beta_1 \neq 0$$

を行うための検定統計量を導出する。

例題 1. (1) と (2) からなる単回帰モデルにおいて、 $\beta_1$  の OLS 推定量  $\hat{\beta}_1$  が正規分布に従うことを証明しなさい。ただし、

$$\hat{\beta}_1 = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} = \beta_1 + \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2},$$

$$s_x^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2$$

である。

(証明) (2) から、 $u_i \sim N(0, \sigma^2)$  (iid の表記は省略) であり、また  $x_i$  は非確率変数である。(証明中断)

.....

- 参考：正規分布の性質 確率変数  $X \sim N(\mu, \sigma^2)$  と定数  $a, b$  について、

$$aX + b \sim N\left(\underbrace{a\mu + b}_{\text{期待値}}, \underbrace{a^2\sigma^2}_{\text{分散}}\right)$$

が成り立つ。この例題では、 $x_i$  が非確率変数であることから、 $\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}$  も非確率変数となる。非確率変数  $\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}$  を定数として扱い、それに確率変数  $u_i \sim N(0, \sigma^2)$  を掛けたもの

$$\underbrace{\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}}_{a \text{ に相当}} \cdot \underbrace{u_i}_{X \text{ に相当}}$$

を考えると、

$$a \text{ を } \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}, X \text{ を } u_i, b \text{ を } 0, \mu \text{ を } 0, \sigma^2 \text{ を } \sigma^2$$

として、上記の正規分布の性質を使うことができる。 $\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i$  に正規分布の性質を適用すると、

$$\underbrace{\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}}_{a \text{ に相当}} \cdot \underbrace{u_i}_{X \text{ に相当}} + \underbrace{0}_{b \text{ に相当}} \sim N \left( \underbrace{\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}}_{a \text{ に相当}} \cdot \underbrace{0}_{\mu \text{ に相当}} + \underbrace{0}_{b \text{ に相当}}, \underbrace{\left[ \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \right]^2}_{a^2 \text{ に相当}} \cdot \underbrace{\sigma^2}_{\sigma^2 \text{ に相当}} \right)$$

が成り立つ。

.....  
 (証明再開) よって、正規分布の性質より、任意の  $i$  について、

$$\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i \sim N \left( 0, \left[ \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \right]^2 \cdot \sigma^2 \right)$$

である。(証明中断)

- .....
- 参考：正規分布の再生性 (確率変数が  $n$  個の場合) 互いに独立な確率変数  $X_1, X_2, \dots, X_n$  がそれぞれ  $N(\mu_1, \sigma_1^2), N(\mu_2, \sigma_2^2), \dots, N(\mu_n, \sigma_n^2)$  に従うとき、

$$X_1 + X_2 + \dots + X_n \sim N \left( \underbrace{\mu_1 + \mu_2 + \dots + \mu_n}_{\text{期待値}}, \underbrace{\sigma_1^2 + \sigma_2^2 + \dots + \sigma_n^2}_{\text{分散}} \right)$$

が成り立つ。この例題では、 $u_1, u_2, \dots, u_n$  は互いに独立な確率変数なので、それらに非確率変数を掛けた

$$\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1, \frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2, \dots, \frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n$$

も互いに独立な確率変数。

$$X_1 = \frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1, X_2 = \frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2, \dots, X_n = \frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n$$

とすれば、上記の正規分布の再生性を使うことができる。これら  $n$  個の確率変数の期待値はそれぞれ、

$$\begin{aligned} E(X_1) &= E \left[ \frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1 \right] = \frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot \underbrace{E(u_1)}_{=0} = \underbrace{0}_{\mu_1 \text{ に相当}}, \\ E(X_2) &= E \left[ \frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2 \right] = \frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot \underbrace{E(u_2)}_{=0} = \underbrace{0}_{\mu_2 \text{ に相当}}, \\ &\vdots \\ E(X_n) &= E \left[ \frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n \right] = \frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot \underbrace{E(u_n)}_{=0} = \underbrace{0}_{\mu_n \text{ に相当}} \end{aligned}$$

であり、分散はそれぞれ、

$$\begin{aligned}
 V(X_1) &= V\left[\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1\right] = \left[\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2 \cdot \underbrace{V(u_1)}_{=\sigma^2} = \underbrace{\left[\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2}_{\sigma_1^2 \text{に相当}} \cdot \sigma^2, \\
 V(X_2) &= V\left[\frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2\right] = \left[\frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2 \cdot \underbrace{V(u_2)}_{=\sigma^2} = \underbrace{\left[\frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2}_{\sigma_2^2 \text{に相当}} \cdot \sigma^2, \\
 &\vdots \\
 V(X_n) &= V\left[\frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n\right] = \left[\frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2 \cdot \underbrace{V(u_n)}_{=\sigma^2} = \underbrace{\left[\frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2}_{\sigma_n^2 \text{に相当}} \cdot \sigma^2
 \end{aligned}$$

となる。

$$\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1, \frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2, \dots, \frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n$$

を合計し、正規分布の再生性を適用すると、

$$\begin{aligned}
 &\underbrace{\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1}_{X_1 \text{に相当}} + \underbrace{\frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2}_{X_2 \text{に相当}} + \dots + \underbrace{\frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n}_{X_n \text{に相当}} \\
 &\sim N\left(\underbrace{0}_{\mu_1 \text{に相当}} + \underbrace{0}_{\mu_2 \text{に相当}} + \dots + \underbrace{0}_{\mu_n \text{に相当}}, \underbrace{\left[\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2}_{\sigma_1^2 \text{に相当}} \cdot \sigma^2 + \underbrace{\left[\frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2}_{\sigma_2^2 \text{に相当}} \cdot \sigma^2 + \dots + \underbrace{\left[\frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2}_{\sigma_n^2 \text{に相当}} \cdot \sigma^2\right)
 \end{aligned}$$

が成り立つ。総和記号を用いると、

$$\sum_{i=1}^n \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i \sim N\left(\underbrace{\sum_{i=1}^n 0}_{=0}, \sum_{i=1}^n \left[\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2 \cdot \sigma^2\right)$$

と表すことができる。

.....  
 (証明再開)  $\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i$  を  $i = 1, 2, \dots, n$  について合計すると、 $u_1, u_2, \dots, u_n$  は互いに独立なので、正規分布の再生性より、

$$\sum_{i=1}^n \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i \sim N\left(0, \sum_{i=1}^n \left[\frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2}\right]^2 \cdot \sigma^2\right)$$

となる。ここで、

$$\sum_{i=1}^n \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i = \frac{1}{(n-1)s_x^2} \cdot \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2},$$

$$\sum_{i=1}^n \left[ \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \right]^2 \cdot \sigma^2 = \frac{1}{[(n-1)s_x^2]^2} \cdot \sigma^2 \underbrace{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}_{=(n-1)s_x^2} = \frac{\sigma^2(n-1)s_x^2}{[(n-1)s_x^2]^2} = \frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}$$

なので、

$$\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2} \sim N\left(0, \frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}\right)$$

である。(証明中断)

- .....
- 参考：正規分布の性質・再掲 確率変数  $X \sim N(\mu, \sigma^2)$  と定数  $a, b$  について、

$$aX + b \sim N\left(\underbrace{a\mu + b}_{\text{期待値}}, \underbrace{a^2\sigma^2}_{\text{分散}}\right)$$

が成り立つ。この例題では、すでに見たように、 $u_1, u_2, \dots, u_n$  は確率変数なので、それらに非確率変数を掛けた

$$\frac{(x_1 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_1, \frac{(x_2 - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_2, \dots, \frac{(x_n - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_n$$

も確率変数。よって、これら（確率変数）を合計した

$$\sum_{i=1}^n \frac{(x_i - \bar{x})}{(n-1)s_x^2} \cdot u_i = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2} \sim N\left(0, \frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}\right)$$

も確率変数。これに  $\beta_1$  を足したもの

$$\underbrace{\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2}}_{X \text{ に相当}} + \underbrace{\beta_1}_{b \text{ に相当}} = \underbrace{\beta_1}_{b \text{ に相当}} + \underbrace{\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2}}_{X \text{ に相当}}$$

は、問題文から  $\hat{\beta}_1$  となる。上式を考えると、

$$a \text{ を } 1, X \text{ を } \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2}, b \text{ を } \beta_1, \mu \text{ を } 0, \sigma^2 \text{ を } \frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}$$

として、上記の正規分布の性質を使うことができる。 $\hat{\beta}_1 = \beta_1 + \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2}$  に正規分布の性質を適用すると、

$$\underbrace{1}_{a \text{ に相当}} \cdot \underbrace{\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})u_i}{(n-1)s_x^2}}_{X \text{ に相当}} + \underbrace{\beta_1}_{b \text{ に相当}} \sim N\left(\underbrace{1}_{a \text{ に相当}} \cdot \underbrace{0}_{\mu \text{ に相当}} + \underbrace{\beta_1}_{b \text{ に相当}}, \underbrace{1^2}_{a^2 \text{ に相当}} \cdot \underbrace{\frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}}_{\sigma^2 \text{ に相当}}\right)$$

が成り立つ。

.....  
(証明再開) よって、正規分布の性質より、

$$\hat{\beta}_1 = \beta_1 + \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x}) u_i}{(n-1)s_x^2} \sim N\left(\beta_1, \frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}\right)$$

となる。

したがって、 $\hat{\beta}_1$  は正規分布に従う (証明終)。

---

$\hat{\beta}_1$  を標準化すると、

$$\frac{\hat{\beta}_1 - \beta_1}{\sqrt{\frac{\sigma^2}{(n-1)s_x^2}}} \sim N(0, 1)$$

となる (証明略)。

⇒  $u_i$  の分散 (誤差分散)  $\sigma^2$  が入っている。 $\sigma^2$  は通常、未知。

⇒  $\sigma^2$  の不偏推定量を  $\hat{\sigma}^2$  とする。 $\hat{\sigma}^2$  を用いた式で上記の統計量を書き換えると、

$$\frac{\hat{\beta}_1 - \beta_1}{\sqrt{\frac{\hat{\sigma}^2}{(n-1)s_x^2}}} \sim t(n-2)$$

となる (証明略)。

•  $\sqrt{\frac{\hat{\sigma}^2}{(n-1)s_x^2}}$  は標準誤差。

• 自由度  $n-2$  の 2 は、推定するパラメータの数 (ここでは  $\beta_0$  と  $\beta_1$ )。

★ もし定数項がなければ自由度は  $n-1$  となり、定数項以外に説明変数が 2 つあれば自由度は  $n-3$  となる。

⇒ 標準誤差を  $SE(\hat{\beta}_1)$  として、 $H_0: \beta_1 = 0$  が真であると仮定すると、 $H_0$  のもとでの検定統計量は、

$$\frac{\hat{\beta}_1 - 0}{SE(\hat{\beta}_1)} \sim t(n-2),$$

つまり、

$$\frac{\hat{\beta}_1}{SE(\hat{\beta}_1)} \sim t(n-2).$$

• 定数項  $\beta_0$  に関する検定統計量も同様の方法で導出できる。

⇒ 続いて有意水準の設定、受容域・棄却域・有意点の導出、検定統計値の計算をすれば、 $\beta_1$  が 0 かどうかを検定できる。